

鯨岡理論と愛着理論の間

遠藤利彦
(東京大学)

はじめに

遠藤と申します。よろしくお願いいたします。ひとりだけ、おそらく、非常に異質な話題提供者なのではないのかなというふうに思っております。松本先生からこのお話をいただいたときに、恥をさらすということで、このお話をお断りするほうがいいのか、それとも鯨岡先生のお話を聞けるというところでベネフィットを感じて、その恥を忍んで参加したほうがいいのか、非常に葛藤があったわけですが、何としてもやはり鯨岡先生のお話を聞いたほうが自分にとってためになるだろうということで、本当に恥を忍んでこの場にやってきました。

で、何の話をしようかということはずっと考えてきながら、何も結局答えが出ないまま、きのうまで来てしまっ。きのう実は横浜で、児童養護施設の研究会がございまして、そこで愛着理論の話を約半日してきたんですね。で、その愛着理論の話をしながら、実は頭の片一方で、鯨岡先生の立場で愛着理論というのを考えると、愛着理論というのはどういうものなのか、ということが、常に意識しながら、ほとんどしゃべっていることが上の空というような状態だったんですが(笑)。まあ、もう、それしかないということで、きのう急ぎよ、飲み会の後、酔った頭でいろいろ考えまして、ようやく新幹線の中でパワーポイントを作ってきたということですので、お手元に資料がないことをお詫び申し上げたいと思います。

それで、おそらくわたしの話は、いちばん、きょうの中ではすごくメカニスティックな話で、鯨岡先生の方法論などから見ると、本当に異質なものだというふうにお感じになることかと思います。

私の「鯨岡理論」遍歴

それで最初、松本先生からわたし自身の鯨岡先生のご研究とかあるいは理論に対する、その近接の仕方ということを、その軌跡とか遍歴のようなことをお話してくださいというような要望をいただいておりますので、ちょっと振り返って。自分の過去を考えるとというのは非常に嫌なことなんです。.....。

先ほどご紹介がありましたように、わたし自身はウィニコットという人の移行対象の研究から始めています。その研究テーマということ自体から、わたし自身がもともと精神分析というものに関心を持ってきたということがお分かりかと思いますが.....。決してわたしはまじめな学生ではなく、今もちろん全然まじめな研究者ではないわけですが、特に大学を卒業して何かをやりたいということがなく就職が嫌で大学院に進学をしたんです。そして大学院に入ってから半年ほど何をしたらいいかということが全然自分でもつかめず、大学の裏手の動物園に通って、キリンと話をする毎日だったんですが（笑）。そのときにさすがに「何かしなければいけない」というふうに、半年経ったぐらいに、あせり始めたときに.....精神分析に関してはそれなりに関心があって、いろいろなものを少し読みかじっていたりもしたんですが、実証研究というところに、やはり心理学という意味では向かわなければいけないんだろうという思いもあり、そんなジレンマの中で苦悶していたわけなんです。そこでたまたまお聞きしたのが、廣松渉先生という方の.....。これはご本になっていますが、『共同主観性の現象学』のご

講演を聞く機会があったんですね。で、その中で実は、それこそ初期コミュニケーションということで、間主観性、相互主観性、あるいは共同注意というようなものですね.....実は非常に、人間の存在にかかわる深遠な現象なんだ、というようなことを痛感するに至って、これはもしかしたらすごく面白いのではないかな。まあ、結果的に

わたし自身はそれを研究していくということにはならなかったんですが、ただ、研究に入りこんでいくときの入り口として、自分にとっては非常にインパクトの大きい講演であり、そして著作であったわけです。そしてその『共同主観性の現象学』というご本を読ませていただくなかで、ちょうど本当に同年ですね、おそらく同じ1986年のご出版だったと思いますが、同じ出版社からやはり現象学ということで、鯨岡先生が『心理の現象学』というご本をお書きになっているということを知りまして、これもぜひ読んでみなければいけないということで、『共同主観性の現象学』と『心理の現象学』は、もちろんそのスタンスは

- 精神分析に対する漠然とした関心：一方で実証研究に向かわなければというジレンマ
- 「共同主観性の現象学」(廣松・増山)との邂逅
- 「心理の現象学」
- 「初期母子関係と間主観性の問題」
- 同時期に「発達心理学研究」の常任編集委員
- 京都大学での研究会参加
- 二回に亘る書評執筆(「人環フォーラム」)
「両義性の発達心理学」
「<育てられる者>から<育てる者へ>」

大きく違うところもあるわけですが、しかし扱っているテーマが大きな重なりがあるということで、やはりのめりこむようにそれを読ませていただいた、ということがありました。

ただ、当時のわたしには、まだそれをすべてしっかり読み解くだけの頭がなくて、かなりすごく格闘したというような思い出があります。自分にとってそれ以上に、実はすごくインパクトがあったというか、実質的に本当に勉強になったのは、やはり同じ年に出版された『心理学評論』に鯨岡先生がご発表された「初期母子関係と間主観性の問題」ですね。これが非常に自分にとってクリアでありまして、で、こうした土台を通して、親子の関係性とか、あるいは子どもの発達ということを見ていくということですね。これが非常に、自分のそのあとの研究というようなものを考える上で、非常にインパクトがあったわけです。ただ、インパクトはあったんですが、なかなかやっぱりそれを具体化できないまま、そして自分が何をしているかもつかめないまま、大学院生活を漫然と送り、その後、運よく大学に就職させていただいてここまで来たということになります。

ただ、そのご本を読ませていただく過程で、実は一度『発達心理学研究』というジャーナルの編集委員会で鯨岡先生とご一緒させていただくという機会がありまして、直にお話をさせていただくという幸運に恵まれまして。鯨岡先生はこういう方だということ、実像をちゃんとつかみながらもう一度『心理の現象学』とか、『心理学評論』の論文にあたることができたというのが、自分にとっては再度、鯨岡先生のお考えというものを確認する上で非常にいい機会になったと思います。また、その『発達心理学研究』の編集委員会を通して、今度は幸いにも京都大学の研究会に、一度、鯨岡先生にお呼びいただいて、そこで愛着の理論の話させていただいたことがありました。実はそのときに、鯨岡先生に話を聞いていただく上で、やっぱり自分自身ちゃんと理解しないといけないと思って相当がんばって自分なりに愛着理論を、いろいろと整理し直したということがあります。実はそのときの仕事というのが、今につながっているということがありまして、ただただ感謝を申し上げる次第です。

で、その当時わたしは九州大学というところに職を得ておりまして、それで九州大学から京都大学へ呼ばれて研究会で発表させていただいたんですが、そのあとで今度は、京都大学の『人環フォーラム』という冊子の中の書評コーナーで、1998年に出版された『両義性の発達心理学』の書評を書かせていただいたということがあります。それから、その後、九州大学から京都大学にわたしが移りまして、また、京都大学にいる間にも、もう一冊、先生の『育てられる者から育てる者へ』という、こちらのご本についての書評も書かせていただくという、これまた大変な大役をいただいたのですが……実は、大変失礼なことをたくさん書いたなということを、今から考えると、非常に背筋が凍る思いなんですが、そういう機会をいただいたということの中で、鯨岡先生のお考えを、自分なりに読みほぐす

というようなことをしてきたつもりです。

さらにその後も実はありまして、先ほど鯨岡先生が、現在、京都市の市営保育所の巡回相談などに深くかかわられているというお話があったわけですが。実は、私はその前に、鯨岡先生の前任の先生のご健康上の問題で、その先生のサブということで京都市営保育所の巡回活動にかかわらざるを得ないという、あるいは保育者の方の研修にかかわらざるを得ないというふうな状況になっておりまして、その中でそれこそ現場を体験させていただくということがあったわけです。で、さらには、先ほどの鯨岡先生のご講演の中でもあったように、京都市営保育所というところは、実は非常にいろんな難しい問題を抱えておりまして、わたしのようなど素人がここで巡回相談をやって、どれだけ何かフィードバックできることがあるのだろうか、非常に悩む時期を過ごしていたわけです。そういう中で実は前任の先生がご不幸に遭われまして、次にどなかにお任せしなければいけないというふうな状況が生じてきたときに、これは絶対、鯨岡先生にお願いするしかないということで、これは、市営保育所のご担当の先生も含めて一致した意見だったんですね。そういう中で恐る恐るわたしが鯨岡先生のご自宅に電話をさせていただくことになりまして、「何とかお引き受けいただけませんか」というふうに震える声でお願いしたというのをありありと記憶しているわけです。鯨岡先生の平穏な生活を奪っているのは、もしかしたら自分なのではないかなと。もしかしたら、今頃、名古屋の方にお住まいになっていたかもしれないのに、その機会も奪ってしまったなということで、大変申し訳なく思っている一方で、先ほどご講演の中で、やはりそういう形でフィールドに関与することができて、学ぶことがまだまだあるんだというお話をお聞きすることができて、内心すごくほっとしているというようなところもあるわけです。

鯨岡理論の両義性①

今お話ししたようなことが一応、私の鯨岡遍歴ということになるのですが、わたしがその中で少し感じてきたことを、鯨岡先生のお考え自体の両義性という観点から少しお話ししてみたいと思います。鯨岡先生がご本の中でご自身のお考えに対して、**Profound**とか、深遠とか難解というお言葉をお使いになることはもちろんないかと思います。しかし、たぶん多くの読者の方が鯨岡先生の本を手にとって実際に読み始めたときに思うのは深くてすごく難しそうだなということなのではないでしょうか。で、さらにその難しさというところには、すごくラディカルな問題提起や主張があるようだというようなことをですね、きっと思っているような気がします。そしてさらに言うと、鯨岡先生がときどき使われる言葉で言えば、例えば「間主観性を世に問うのだ」というようなとても戦略的な書き方を現にされているということです。さらには従来の例えば個体内意識だとか、あるいは個体能力

主義というようなものに対する、あるいは、関係を問わないという従来の発達心理学、あるいは機械論的なもの、そうしたものに対するアンチテーゼとして、自分自身の考えはあるんだということを積極的に発信してくるわけです。

で、わたし自身も、まさに鯨岡先生に、スライドの左側の、**Profound** であり **Radical** であるところ、つまり、アンチテーゼの部

分というのを、非常に強く感じるところがある一方で、実は、何回も何回も読み進めていくと、実は深遠／難解というところの、例えば様々な言葉の意味が分かってきたその後に来るのは、実はすごく平明な内容なのではないかということなのです。この平明というのは、チープとかという意味ではなくて、要するにわれわれの体験と非常に、ある意味合致するようなもので、すんなりと読めてしまうというようなところがあるんじゃないかということですね。

それから、**Radical** というものとは逆に、非常にある意味 **Conservative**、これは悪い言葉というよりは、すごく、われわれが本来押さえておくべきものを、ちゃんと、素直に提示してくれていると考えることもできるんじゃないかということですね。それは **Strategic**・戦略的とはほど遠い、むしろ **Orthodox** な手法というものをわれわれに開示してくれているんじゃないか。あるいは、すごく自然なやり方というのを、鯨岡先生はきっといろんなご本の中に書いてくださっているのかな。もっと言うと、反定立というよりは、定立というのが、要するに鯨岡先生のご本に記されていることなのではないか。実はいつも自分の中では、（スライドの）その左側と右側というのが揺れるんですね。揺れて、そしてどういうふう

に自分の中で整理していったらいいのかというのが、ときどき分からなくなることがあるわけです。

そして実際に鯨岡先生のご本をゼミなどで使わせていただくという機会が、何回も、九州大学あるいは京都大学の学部生の授業なんかでありました。そのときに学生さんの素直な感想、あるいは、これはもしかしたら自分自身の 20 年前.....20 年前と言わず、つい最近までのわたし自身の感想なのかもしれないんですが。一生懸命すごく読んだ学生さんほど、割合共通して抱く印象というのがあったんですね。すごく、そういう学生さんというのは、やっぱり何か大切なことが書いてありそうだという直感みたいなものが最初にあるから、がんばって読むんですね。だけど、がんばって読むけれども、最初いろんな概念上の仕掛けがあって、その術語とか理論の道具立てというところの難解さに四苦八苦するわけです。

鯨岡理論の両義性①

- **Profound / Plain**
- **Radical / Conservative**
- **Strategic / Orthodox (Natural)**
- **Anti-these / These**

ね。しかし、それが分かり始めると、要するにしぶとく読んでいくと、難解さが氷解して内容がすんなりと入ってくる感じというのを、よく学生さんは言うんです。ただし、それと同時に、意外ということでもあるんですが、「わたしにはつかみ所が分からないんです」とか、あるいは「落とし所が見つからないんです。これはまだ、わたしの読み方が浅いんでしょうか」というようなことを、すごく真面目な学生さんはいつも

- 学生さん(と同時に20年前の私?)の素直な感想
- 何か大切なことが書いてありそうという直感
- 一生懸命読む→術語等の理論の道具立てに難渋さを覚える→しかし、それでもしぶとく読む→難解さが氷解して内容がすんなり入ってくる感じ→しかし「つかみ所がない」「落としどころが見つからない」ような感覚→「全部重要なのかも知れませんが、すべて当たり前のように思えてきて、特に何が一番大切なのかということがわからないんです・・・」
- 「ひとがひとをわかるということ」の中での鯨岡先生ご自身の述懐

聞いてくるわけですね。そこで自分もなかなかやっぱり答えきれない。何か、「全部重要なのかも知れませんが、すべて当たり前のように思えてきて、特に何がいちばん大切なのかということがわからないんです」というような、要するに率直な感想を述べてくる学生さんというのが時折いるわけです。そういう感想と、鯨岡先生ご自身が「ひとがひとをわかる」ということの中で述懐されていること、「今の学生さんは」というところですね。お読みになった方もいらっしゃると思いますけれども、「理論を理論として受け入れてしまうので、おそらくそれで入っていかないところがあるのだろう」という書き方をされているところがあるんですね。まさにそういうところに、もしかすると、わたしが感想を聞いた学生さんの思いというのはあったのかなという気がするわけです。

そういう中でじゃあ、「どうやったら」ということがあるわけですが、実はこれはすごく、先ほど申し上げた例の書評の中で、今考えると背筋が凍るというようなことのひとつなんですが、鯨岡先生を「複雑なるものを複雑なるままに提示する類いまれなる発達心理学者」という、妙な言い方をさせていただいたこ

とがあります。これは、複雑なるものを何も説明しないで複雑なるままで提示するとか、そういう意味で書いた文章ではまったくなくて、複雑なものを、変に、要するに因果論的に簡略化しないで理解することが重要なんだというメッセージを非常に強く、われわれに送ってくれているという意味で書いたものなんです。どう見て

- 書評において「複雑なるものを複雑なるままに提示する類いまれなる発達心理学者」と記す
- 元来、複雑で厄介な現実から目をそらさないことの大切さ→徒な捨象や単純化は、歪んだ発達理解や実践、また無用の社会的言説を生む
- 一読して難解な文体の背後に、単純因果論に誘うようなトリッキーな仕掛けはなく、読者は関係発達の複雑性にそのまま向き合わされる
- そして、そこでの読者の戸惑いが先のような感想を生みがちなのかも知れない
- その先に在る鯨岡理論の髓に迫る方途は何？

もやっぱり複雑である現実から目をそらさないことの大切さ。要するにいたずらな捨象とか単純化というのは、やっぱりゆがんだ発達理解につながってしまうということ、おそらく鯨岡先生が従来の発達理論に対して非常に先鋭的な見方をされているのは、まさにそう

したところなんだと思うんです。要するに、複雑なんだから複雑なままとちゃんと理解していこう、ちゃんとそれを説明していこう。これは、先ほどの大倉先生が、すごく密に密に記述されていく中で説明が浮上してくるという言い方をされていたかと思うんですが、まさにそのスタンスを貫かれているんだということを、わたし自身感じていたんです。ただ、先ほどもお話したように、最初から理論を理論として受け入れてしまうと、なかなか逆に単純因果論を誘うようなトリッキーな仕掛けがないわけですね。結局、割合、われわれ、わたしもそうなんですけれども、非常に単純因果論的にひとつの概念でクリアに説明されたものに対して分かったみたいな感覚を覚えることがあるわけですが、それがなくて、結局、読者は関係発達の複雑さにそのままに向き合わされることになって、そこでやっぱり戸惑いのようなものが、先ほどのような感想を生みがちなのかもしれないなというふうに思ったのです。

しかし、じゃあ、その先にある鯨岡先生のお考えの核に迫る方途というのはいったい何なのかということになるでしょう。これはまさに鯨岡先生が『ひとがひとをわかるということ』の中にお書きになっていることで、例えば鯨岡先生、先ほども……話がありましたけれども、ルサンチマンという言葉をつぎつぎ使われます。要するにドミナントなもの、すごく優位化しているものに対して、あるいは優位化している何かパラダイムのようなものに対して、孤軍奮闘でがんばっているけれども、いつもそこで負けてしまうという

ような、そういう意識の中で、ある種、ひねくれた形で、発達というようなものを考えていらっしゃる。でも、先ほども申し上げたように、実は全然ひねくれていたわけではなくて、オーソドックスなんですよね。ですけれども、そういうルサンチマンのようなもの、あるいは現場

- ・「ひとがひとをわかるということ」の中のヒント
- ・ドミナンスへのルサンチマン・現状への飽き足りなさ・現に子どもや親を前にした当惑や悪戦苦闘
- ・鯨岡理論は読者自身が鋭い問題提起を有することを要求する
- ・読者の視点が一種の当事者性に裏打ちされて在る時にそれは最も「体感」されやすいのでは
- ・読者の問題提起に沿って、きわめて巧緻に記述・説明された、複雑に織りなす発達という綾の中の、ある「綾目」が鮮明に浮かび上がってくる
- ・何かあった時にすぐにと思い、書棚の一番目につきやすいところに「鯨岡コーナー」を設ける

で実際に、日々苦闘されている方々の現状への飽き足りなさのようなもの、こういった何かモチベーションにつながるもの、「何か知りたい、何か足りない」というような、そういったものがないと、読者はなかなか、自分の読みを構成していけないというところがあるのかなという気がするんです。そういう意味では、鯨岡先生のお考えというのは、読者自身に、非常に鋭い問題提起を有することを要求するような考え方なんじゃないのかな。鯨岡先生は、ある種、非常に巧緻な書き方をされる、類いまれな発達心理学者であることは、これはもう誰もが疑わないところだと思うんです。しかし、それと同時に、読者にもちゃんとそれを読み込むだけの鋭い問題提起を要求してくところがある。実はそういう問題

提起を持てたところで初めて、実は、ちゃんと鯨岡理論の真髄というものに迫りうるんじゃないんでしょうか。これは先ほどの大倉先生の話に実践という言葉がありましたけれども、やっぱり一種の当事者性に裏打ちされてあるときに、体感されるという性質を持っている。それが鯨岡先生の書き物であり理論なのかなという気がします。

その人なりの問題提起があることによって、ある種、非常に巧緻に説明された、その複雑性というなかで、要するに自分自身のその問題提起に沿ったかたちで、関係発達という非常に広大な織り物の、その重要な綾目のようなものが、くっきりと浮かび上がってくるというようなところがあるんじゃないかな、という気がしています。で、実はわたしもたぶん、全然鯨岡先生のお考えを、まだまだ理解できていないという意識が強いので、わたし自身はそれこそ、現場などに出ていって何か、すごく強烈な違和感のようなものを感じたときに、それに該当するものはないかなということで、書棚のいちばん目につきやすい所に、鯨岡コーナーというのを設けまして、鯨岡先生の本をずらっと並べて、それを見ようとしています。ある意味、ハンドブック的な使い方で、それで読むようにしています。そういう読み方が少なくとも自分には、鯨岡理論の理解の仕方としては、しっくりくるなということを考えたことがあります。

鯨岡理論の両義性②

それから、鯨岡理論の歴史で、先ほどのような話ではないんですが、読んでいて感じるのは、鯨岡先生の究極のご関心というのは、やっぱり、基本的に関係性個々の、その特質というようなものをやっぱり削ぎ落とさないということですね。まあ、この Normative/

Individual という言い方、この Individual というのは、個体という意味ではなくて、関係性個々ということですね。それぞれの、例えば母子関係、父子関係というものの、そのありようというようなものに迫っていく。基本的にすごく Individual な方向性に究極の関心をお持ちなんだけれども、しかし、それでいて、鯨岡先生がご本の中で

鯨岡理論の両義性②

- Normative / Individual (関係の個別性)
- 鯨岡理論において提示された概念・術語の大半→normative component
- individual component(個人間・関係間の差異)を射程に入れながら、それに直接的に関わる概念・術語は稀少
- テーマ的に通底する精神分析やアタッチメント理論とは好対照
- normativeな術語を通して関係性の個別性・多様性を描出しようとする

仕掛けてくるさまざまな概念というようなものですね、それらは実は、むしろ、ほとんどすべての人間に、ある意味共通して当てはまる、非常に本質的なところ、言葉は悪いかもしれませんが、要するに Normative Component にかかわる術語だけなんですね。別の言い方をすれば、その Individual、例えばこの母子というのは、こういう特質を持ったタイプだというような形の概念化ということをするのは、おそらく決してないということです。

これは鯨岡先生のスタンスからすれば当たり前なんですけれども、しかし、テーマ的に通底する精神分析は、例えば、これはあと少しお話するアタッチメント理論なんかは、逆に個別性というようなものを概念化していった、そしてその個別性というようなものの問題であったりとか、あるいはその個別性というものが生じる背景みたいなものを説明しようとする、そういうふうな説明の仕方に対して、非常に Normative Component を通して、関係性の個別性とか対応性を描出しようとするスタンスというのは、意外にないなというか、これはもしかしたら鯨岡先生の書き方の特徴なのかなというふうに感じることもあるわけです。

鯨岡理論の両義性③

それからあと、これはまたお叱りを受けることかもしれませんが、もう1つある関心のほうは、Art と Method ということでですね。実は1986年段階の『心理学評論』の先生の論文の中には、アートの的なもの、ある程度必要だという書き方をされているところがあって、逆に自分はそれでほっとしているようなところも、かつてはあったんですね。しかし、その後のご著作を読んでいくと、やはりこうしたものをしっかりと、現場で生じているその関係性の中の、要するに、間主観性の綾、あるいは、疎通性の綾のようなものを見ていくためのしっかりとした方法がある。で、その方法というようなものを何とか見極めていきたいというモチベーションが生まれてくるわけです。そういう中で、先ほどのお話のように、『両義性の発達心理学』の書評を書かせていただいたときに、わたしはすごく失礼ながらこういうことを書かせていただいたんですが、「本書の成果が著者個人の妙なる技のなせるものか、万人に対して開かれた確たる方法としての参加観察がなせるものなのか、まだ判断がつかない。発達心理学とはいかにして著者の言う、印象受容能力を高めて、そして子どもの内なる現実を語りうるのか」。

またこれも、背筋が凍るようなことを書いたというふうに思うわけですが、少なくとも当時、自分自身は読み切れていなかったんですね、その部分。そしてこの印象受容能力というところに逃げるのはちょっとずるいなというふうに思ったところも正直あったんです。いわゆるアートの部分というのはすごく強いんじゃないかというふうに

思っていたんですが、その後、いろいろとその後の1999年のエピソード記述に関する『心

鯨岡理論の両義性③

• Art / Method

- 「両義性の発達心理学」の書評(約10年前)
- 「本書の成果が、著者個人の妙なる<技>のなせるものか、万人に対して開かれた確たる<方法>としての参加観察がなせるものなのか…まだ判断がつかない…発達心理学の徒はいかにして著者の言う<印象受容能力>を高め…子どもの内なる現実を語り得るのか…」
- 私の中の印象の移ろい→ **Method > Art**
- 他論者では<Art>とされるものを緻密なメタ化の作業を通して<Method>の域に高める
→参加観察者の間主観性を方法化する営み

理学評論』の論文とか、さらにその後の、『エピソード記述入門』というあたりですね。鯨岡先生のその後のご著作を読ませていただくと、少なくとも自分の中で、アート性よりもすごくメソッドの部分というのが強まってきたというのを、はっきりと感じるんです。そういう意味からいうと、当時のわたしの読みはいかに浅かったかということなわけですが。ただ、普通であれば、ほかの論者は、おそらくアートのままで済ませてしまうような気がするんです。しかし、鯨岡先生の場合、普通だったらアートとされ続けるものを、これは先ほどのメタ観察という言葉がありましたように、あれは個々の観察をさらにメタ的にもう一度観察するということですが、そういうメタ観察をする研究の営みとか、あるいは現場に入り込んで例えばお母さんや子どもと接するというようなものをすべてメタ化するという作業の中で、おそらく鯨岡先生ご自身のメソッドというようなものを、われわれに開示してくれているんだなという気がするわけです。要するにすごく緻密なメタ化というのが、これが先ほどの記述というものを通して進めるというところにつながるころなのかもしれないですが、このメタ化の作業というようにところに、ある意味での驚きというようなものを感じた気がします。参加観察者の間主観性を方法化する……間主観性を方法化するって、実はすごく難しい。難しいというのは、「できるのか」というふうに、かつての自分であれば、たぶんそこで思考が止まっていたところかもしれないですが、それを現にやっていたらという事ですね。そういうところで、非常に驚きを感じて……。

「間主観的」理論の必須不可欠性

で、これとのつながりで申しあげますと、間主観的理論というのは、やっぱり発達研究とか母子研究、これは当たり前のことかもしれませんが、絶対的に必要だということ。こうした思いを、私自身、日増しに強めているようなところがあります。で、先ほど申し上げたように、1986 年段階の『心理学評論』の中で、先生は戦略的な概念として間主観性を問うています。そこには、母子の中に、当然認められる間主観性を拾う、あるいはそれを中核にして子どもの発達を考えることが必要だという主張、と同時に、それを理解するためには、要するに研究者自身がその間主観性というようなものをつきと見つけていかなければいけない、そういう主張があったわけです。

しかし、その後の流れを考えると、間主観性という術語はある意味、まさに発

「間主観的」理論の必須不可欠性

- 1986年当時: 戦略的概念としての「間主観性」
- 「間主観性」→ 今や発達心理学の中核的テーマ
- 「心の理論」の先駆体への関心
- ただし、それは間主観的状態を成り立たせる「器」(個体内の機構)とその系統・個体発生プロセスの解明
- 「器」の「中身」(二者の間主観的状態)は不問
- 間主観性に間主観性を排して臨む(「機械の耳目」を通した自然科学的アプローチが主流)
- 鯨岡理論: 間主観性の「中身」に間主観性を通して臨む(「生身の人の耳目」を通した了解の試み)

達心理学の中核的なテーマに今現在なっているわけですね。ただし、それは、「心の理論」の先駆体というようなものへの関心として、要するに相互主観、Inter-Subjectivity というようなものに対しての関心として、その言葉への注目があるということなのだと思います。で、結局それは何かというと、間主観的な状態を、実は成り立たせる器、というような、言い換えると結局、個体内の機構ですね。要するに、なぜ、子どもは間主観的なのか。例えば他者の意図を理解できるようになるか。子どもの内側でどういう、それこそ能力というようなもの、そういったものが萌芽してくるのか、という問い方なわけです。で、まさにその系統発生とか、あるいは個体発生のプロセスの解明というところに躍起になっているところがあるわけです。しかし、実はこういう研究の中では、器の中身というところを問うことは、実はほとんどない。もっと言うと、現に子どもというのは、じゃあお母さんと何に……例えば衝動的に巻き込まれてそこで何を感じ取っているか、というようなこと。確かにときどき事例的に1つ2つ、そういうものが紹介されることがあるんですが、それ自体が考察の対象となることというのはほとんどないということですね。もっと言うと、間主観性という研究テーマは、非常に注目されてはいますけれども、その間主観性に間主観性を排して臨むということですね。私自身がときどき使う言葉でいうと、機械の耳目。機械の耳目というのは、それこそ例えば、高精度のビデオというような機器を使って、そして、ミリ秒単位で例えば微視的に子どもの行動であったり、あるいは、母親の動きをとらえる。あるいは発声上の変化などをとらえるんですね。あるいは、表情の非常に一瞬のゆらぎというようなものをとらえる。そういうようなものがあったり、あるいは生理的な指標というものを巧みに使う。さらには、いわゆる脳内マッピングのように、脳の中で、例えばインタラクションというようなものと同時進行的に、脳の何が賦活されるのかを調べようとする。そういうある種、機械の耳目をもって、自然科学的にそれにアプローチしていくということが、非常に優位化している。もちろん、これはこれで、発達心理学の方向性としてはありだなというふうに思うところもあります。しかし、ありだなと思う一方で、そういう例えば脳研究を、脳研究の立場から間主観性というところに例えばアプローチしている方が、それで、要するに、これが発達というところの現場にこういうふうな実践的な意味があるんですというふうに、割合、安直に実践との間に橋を架けてしまうというようなことがありがちなわけですね。そうするとすごくそこに違和感を感じるというのがあるわけです。

ま、実は自分自身も間主観性というようなものについては、直接研究してこなかったというのがあるんですが、割合最近になって、社会的な参照というようなことに対して関心を持って、実際にお子さんの観察とか、あるいはお母さんの観察というのをさせていただくことがあります。そして、そういう共同注意とか、あるいは社会的参照の研究なんかを

見るにつけ、やっぱりわたし自身が感じてきたのは、実は、共同注意、あるいは社会的参照ですね、ひとつのものを、子どもとお母さんがトピックを共有して、お母さんが笑ったものに子どもという存在がまさに情動的に絡み合っている。その情動的に感応していく部分というのが本来そこで最も問題になるわけですが、しかし、決して、ドミナントな発達心理学の中で、今多く行われている共同注意や社会的参照の研究というのは、この三者関係そのものを現にとらえようとはしないわけです。というのは、結局、例えば社会的参照なんていうのは、養育者が例えばあるトピックを見て、現に笑ったか泣いたか怒ったかという、養育者の情動のありようというようなものが、不可分に関与しているにもかかわらず、基本的にそうした養育者側の情動的な動きのようなものは何も問わない。要するに、子どもが基本的にただ、他者の表情の意味を盗みとれたか否かという、そういう形でのまさに能力の発達だけを語るところがあるわけです。しかし、それはすごく違和感を感じるところで、できるだけ養育者というものが発信するものに対して子どもがどういふに絡められるのか、もっと言うと、やっぱりその共同注意とか、あるいは社会的参照の成り立ちに、養育者の役割とか、あるいは関係の役割ということを問わないと、これは自然科学的なアプローチであったとしても、やっぱり片手落ちだということをずっと考えてきたところがあります。ましてや、まったくそのところ（共同注意や社会的参照に関わる子どものごく一部の能力だけを取り上げ、あくまでも他者との関係の中で生じるものとしてある、そうした現象そのもの）を問わない自然科学的なアプローチというのが、これで現場に対して、例えば自閉症のお子さんが共同注意ができないということに関して、一定の示唆というものがもたらされるだろうなんて言っているのを聞くと、非常に違和感を覚えるところがある。

それに対して、鯨岡先生のそのアプローチというのは、間主観性の中身に、間主観性を、まさにからだを通して臨む、生身の人の耳目というものを通した了解の試みなんだと思うわけです。これはずっとこれまでも、先生ご自身のご講演

の中でもあったことだと思うんですが。で、なぜ、それが必要か、あるいはなぜ、それが抜けてはいけないかというと、結局、われわれ一人一人が持っているのは、生身の耳目でしかない。生身の耳目でしか見聞きできないものを、例えば機械の耳目でとらえたものによって語ること、そこにどれだけの意味があるかということですね。現に例えば養育の現場で、子どもが何をしているかというような、その心的状態に対する例えば養育者の読み

- 日常生活者としての私たちは、生身の諸感覚を通して相互に社会的情報を感知・感応し、「心」を疎通させる
- そして現にその主観性に彩られた文脈において養育の営みは生じ、関係性が展開する
- 発達という現象が、元来、様々な主観性を内包したものである以上、その主観性のフィルターを通した記述・理解や理論構築が必須
- 現在の発達心理学→高機能・高精細の機械の耳目や私たちが日常的に知り得ない神経・生理的指標を通して発達現象の「現実」を暴き出す
- しかし、その「現実」は人が素朴に捉えうるまう日常的現実とは本質的に異質なもので時に大きな齟齬
- プラクシス性を志向する発達心理学は果たしてどちらの「現実」に依拠すべきなのか？→言わずもがな

取りというのは、まさに養育者の生身の目や耳とか、あるいは肌で感じたものとして初めてあるんですね。もっと言うと、要するに生身の感覚器官のフィルターを通した情報で、基本的には母子のやりとりというのは展開していくわけです。そうすると、あくまでもそのフィルターを介して多様な解釈が生まれ、あるいは多様な動機付けが生まれるというような中で、現実に関係性が展開して、そして子どもの発達が展開していくということになります。そういう当たり前のことを考えると、やっぱり、その生身の耳目というフィルターということを抜きにした発達理論というのが、現場にどれだけ意味を持つのか、ということがすごく気にかかるわけです。

先ほど、発達心理学とか、あるいは発達研究が、素朴な営みとしてある子育てというものを、むしろ壊しているんじゃないかというようなご発言が、確か鯨岡先生の先ほどのお話の中にあったと思うわけですが、私自身も、まさにそれが生じているんだということを実感せずにはいれない感じなのです。要するに、われわれの了解のレベルと全然違う、もっと言うと、生身の人間がとらえるものとはまったく違う観点から発達を記述する。それはそれで何か意味はあるかもしれないけれども、しかし、子育ての現場で、現に、例えば子どもに向き合う養育者というのは、まさに生身の耳目を持った人間でしかないですね。だとしたら、そこでの理論構築こそが、子育ての現場とか実践というところでもっともっと重く見られなければいけない。そここのところが、非常に再確認されてしかるべきだということを、強く最近思っています。そういう意味で、鯨岡先生が、これからもがんばってがんばって、いろいろと主張してくださるということを、ただただご期待申し上げたいということになるわけです。何か他力本願のようで、ずるいかなと思しながら（笑）。

「鯨岡理論」から「愛着理論」を観る

それでちょっと、それだけでだいぶ時間が経ってしまったわけですが、昨日いろいろ考えていたということで、鯨岡理論から愛着理論。なんで愛着理論を見るかということ、結局、愛着理論というのは、一般的にはそれこそ関係性の発達理論という位置付けをされているからですね。まさに関係発達論というふうな意味を非常に強く負った鯨岡先生の理論と、多くの人がやっぱり重ねて読むことがあるだろうし、現実には鯨岡先生のご著作の中には、愛着理論というのは、しばしば厳しい批判のやり玉に上がっているんですね。皆さんはご存じのとおりだと思う。で、この機会に愛着理論というものの、方法論的な限定性であったり、あるいはその結果の持っている意味の限定性みたいなものを、自分自身、考えさせていただくことは、自分にとって意味があるかな、ということで、少しこんなことを考えてみました。

愛着理論における関係発達

で、愛着理論における関係発達。鯨岡先生の理論というのは関係発達論ということですね。で、鯨岡先生は関係発達論の意味として、関係の中での発達ということと、関係としての発達、その二側面をとらえるのが関係発達論の骨子なんだというふうなことをおっしゃっています。じゃあ、それに対して見たときに、アタッチメント理論って何か。一応、アタッチメント理論というのは、ジョン・ボウルビィという人自身が、関係性とパーソナリティの生涯発達理論というふうに言っています。

そして現実的にそういう位置付けをされているところがあります。しかし、実態はどうかというと、パーソナリティの生涯発達理論とは、かろうじて言えるかもしれない、実は。しかし、関係性の生涯発達理論では必ずしもない可能性も高い。何でかということ、実は関係の中での発達というふうな観点から見ると、確

かに乳幼児期における母子関係、あるいは、母子以外のほかの保育者との子どもの関係ということですね。まさに二者の中で、子どもの何が立ち上がってくるのか、というような、その問いを、アタッチメント理論というのは非常に強く持っています。しかしじゃあ、乳幼児期を超えて、例えば児童期の子どもと母親の関係とか、青年期の子どもと父親の関係みたいなものを、どれぐらいアタッチメント理論というのが問い続けるかということ、ほとんどないわけです。実はここで、話が1つ終わってしまう。

さらには、関係としての発達ということになると、それを問うことはほとんどないということですね。だから、関係の中での発達ということに関しても、非常に限定的なアプローチであるし、ましてや、関係の発達、関係としての発達、具体的に、どういうふうにその関係の特質自体がつくられていくかというプロセスというのは、あんまり、実はアタッチメント理論の中では主要なテーマとはされてきていないというところがあったということですね。アタッチメント理論の焦点は何かというと、実は関係性そのものではないですね。関係性というものをとおして、個人の中に

愛着理論における関係発達

- 鯨岡理論＝関係発達論
- 関係の中での発達＋関係としての発達
- アタッチメント理論
- 関係性と人格の生涯発達理論(とされる)
- しかし、実態は人格の生涯発達理論とは言い得ても、関係性の生涯発達理論では必ずしもない
- 関係の中での発達→主に乳幼児期においてのみ、それを問題にする
- 関係としての発達→それを問うことはまずない

- アタッチメント理論の焦点
- 関係性そのものではなく、「個に内在化された関係性」(＝Internal Working Model)
- アタッチメント理論における様々な類型
回避・安定・アンビヴァレント・無秩序など
→関係性の特質ではなくあくまでも個体の特質
- 乳幼児期においては誰とのいかなる関係性かを際立って重視しても、それ以降は基本的に誰との関係性かということ問わずに、誰であるかに拘わらず、他者との関係を一定のバイアスをもって営もうとする個人特有の情意傾性を問題にする
- ある種の個体内主義がそこに在ることは否めない

内在化されたものをもっぱら問うわけです。そして、それを一般的にインターナル・ワーキング・モデルのような言葉で片付けてしまうわけです。そして、インターナル・ワーキング・モデルの中で、現に何が生じるかみたいなことも、実はあんまり、本当は問わないといけないんだけど、問う研究者が非常に少なかったりするわけですね。

で、アタッチメント理論におけるさまざまなタイプをご存じだと思いますが、回避型とか安定型とかアンビアレント型とか無秩序型とかいろいろあると思います。でも実はあれは、関係性のタイプではないですね。例えば回避型というのは、その母親と子どもの関係のタイプかという、実はそういう理解はされないんです。あくまでもその子どもの、要するにほかの人への近付き方の特徴のタイプ。要するに、個人の特質ではあっても、決して関係性の特質ではない。で、先ほど申し上げたように、乳幼児期においては、誰との関係性かというのを、際立って重視します。しかしそれ以降は、基本的に誰との関係性かということをお問わずに、誰であるかにかかわらず、他者との関係を一定のバイアスをもって営もうとする個人特有の情意傾向ですね。ここだけを問題にするわけなんです。これが実は言いたかったんですけど。そういう意味からすると、ある種の個体内主義というのがそこにあることは否定できないという気がいたします。

愛着理論における間主観性

まあ、関係性の理論と言われながら、実は要するに個人の、それこそインターナル・ワーキング・モデルのようなものを中核にした考え方がアタッチメント理論なんだろうなという気がします。

それから、愛着理論における間主観性。これは実は潜在的にはさまざまにとらえられている可能性があります。元は、子どもの側とか母親の側というふうに分ける考え方というのが、本来であれば鯨岡先生のお考えに沿わないものかもしれないんですが、一応ちょっと便宜的に分けると、子ども側の間主観性というのは、

例えば、ジョン・ボウルビーが「アタッチメントの発達」というところで述べているんですね。例えば幼児期におけるその最終段階として、目標修正的なパートナーシップ。目標修正的というのは、ゴールとしてはくつついて安心感を得たいという、そういうゴールをどんな子どもも持っている。どんな子どもも持っているけれども、しかし、お母さんは今、台所で仕事をしていて手が離せない。だから子どもは、少しでもお母さんのその気持ちを

愛着理論における間主観性

- 子どもの側の間主観性
 - 目標修正的パートナーシップ
 - 間主観性の介在→関係性の変質
 - 物理的近接から表象的近接へ
 - (IWMによって導かれた)間主観性が介在することによってfelt securityの確保が複雑化
 - 物理的に近接していなくても安全感が得られる場合がある一方で、物理的に近接していても安全感が得られない場合がある→養育者・パートナーはいかなる情意をもって自らと関係を取り結ぼうとしているのか
- が、実証的にここに踏み込むことはほとんどない

汲み取って、ちょっと待ってるんですね。そして、仕事が終わったら、じゃあ一緒にくっつけるというようなこと、そういうことができるようになる。もっと言うと、そういうある種の他者の意図であったり、あるいは感情のようなものにもとづいて、若干自分のゴールというものの追求の仕方を調整できるようになる段階というのがあるだろうというふうに言ってるわけですね。まさに、間主観性というものが介在することによって、関係性というものがある意味柔軟なものになっていく。そういうところをジョン・ボウルビー自身が言っているわけです。さらには、アタッチメントの発達というのは、物理的な近接から表象的な近接。要するに、実際の身体的近接、べったりとくっついて安心だという感覚から、頭の中で誰かにくっつけるだろうという、その見通しという主観的な部分で安心できる段階へと、移行することが仮定されています。実は、この表象的な近接というのは何かというと、実は、他者の意図とか自分に対する情という観点から、その関係性というものを、個人がやっぱり解釈し直すところがあるということですね。もっと言うと、これが人間のアタッチメントの非常に難しいところなわけですが、身体的にはくっついていても全然安心できない場合がある。その逆に、物理的には近接していなくとも安全感が得られる場合がある。要するに、身体的にくっついていられれば、それで安全で発達がうまく進むかということそうじゃなくて、逆にだっこされながら、お母さんが自分のことを嫌ってるんじゃないかというふうに思い始めた子どもというのは、そこで必ずしも、実は安心感というものにやっぱり浸れない、不安というものにさいなまれることになる、ということになるわけです。

で、まさにその養育者あるいはパートナーがいかなる情意をもって、自らとの関係を取り結ぼうとしているのかということに、おのずと意識が向いてしまうのが人である、ということがとりわけ重要だということになります。しかし、このことは、一応、アタッチメント理論の中では認識されていることにはなっているんですが、それでいて、研究の実際としては、実証的にそこに踏み込むことはほとんどない。そこは鯨岡先生がいろんなご著作で書かれているとおりです。それこそ、ストレンジ・シチュエーション……後で申し上げますけれども、ああいったところで測られるのが、あくまでも行動的なレベルでのくっつきみたいなものであって、実際のところ、間主観的なその疎通性のようなものが、どれぐらいターゲットになっているかとなると、実は非常に怪しいという気がいたします。

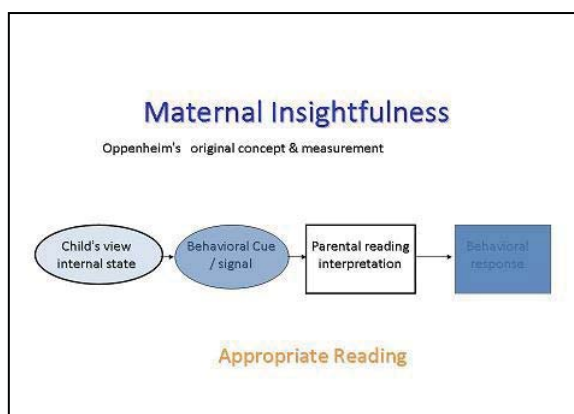
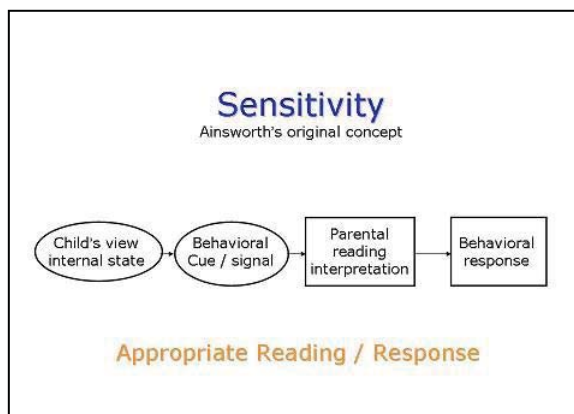
それから、養育者側の間主観性ということで、原理的には、これはすごくセンシティブティ、愛着理論でいうところのセンシティブティにかかわる問題だという気がします。で、エインズワースのもともとの仮定というのは、子どもの心理的なスタンスとか、主観的な状態の読み取りというものを含む概念だったんですね。で、まさに（スライドの）こういう感じですね。子ども自身が、潜在的にどんなものを好む傾向があるんだろうか、インタ

ーナル・ステイト、内的な状態とか子ども自身の考えとか、そういうようなものであって、そして、そういう内的な状態というものが、何らかのシグナルとして表れて、それを養育者が読み取って、そして反応するという、この一連のプロセスというのが、エインズワースの言うセンシティビティの全貌なわけですね。

しかし実際、研究の中でとらえられるところというのは、ここ（主観的状态の読み取りの部分）が基本的にはすっぱされるわけですね。ほとんど。基本的に、行動上の、例えば近接愛着のシグナルに対して、具体的にどう反応したかというところだけでセンシティビティがチェックされて、いわゆる主観性にかかわるところは、どんどん削ぎ落とされていくというのが、愛着研究なわけですね。

- 養育者側の間主観性
- 原理的にsensitivityに大きく関わる
- Ainsworthの元々の仮定は子どもの心理的スタンスや主観的状态の読み取りを含む
- しかし測定のレベルでは多く不問に付される
- が、近年＜transmission gap＞等の問題により、sensitivityの代案が様々に模索されている
- Maternal Insightfulness (Oppenheim)
- Mind-Mindedness (Meins) → 成り込み？
- ただし必ずしも同時的読み取りを問題にしない

そういう中で、実はこのセンシティビティという理論的にはもろに間主観性に触れる概念ではあるけれども、実証的なレベルになると、もうそれは基本的に問われないという研究の構造があったという気がします。ただ、最近になって、実は少し、やっぱりそれを問わないと、人間のアタッチメントは分からない、ということで、養育者側のもっともっと主観的な部分に踏み込んでいくところで、例えば Maternal Insightfulness という概念が提唱されてきたりします。これは実際に子どもとのインタラクションを見て（それは現時現空間で今感じていることというわけではなくて、自分自身のインタラクションの場面をビデオでもう1回振り返って）そこで子どもが何を感じているとか、あるいは何をしたいと思っているかみたいなことを、それをインタビューを通して取り出して、養育者というのはどれぐらい洞察性というものが



あるか、みたいなものを測定しようとするといいます。また、Mind-Mindedness という、つい、子どもの心というところに気がいってしまうという養育者の傾向みたいなものですね。つい、何か気になって、これはもしかすると、鯨岡先生が「志向の影響」とか「なりこみ」というふうなものとして語っているものにつながっていくのかもしれませんが、そういうようなところを重視していかなければいけない、というふうな流れは確かに生じてきているかなという気はいたします。ただ、まだ現実にはなかなか研究に乗らないということがあるわけですが。

で、本当はもう、終わりですよ(笑)。終わり、ということですが、あとは方法論としての間主観性なんてことという、要するに発達心理学の中で、生涯発達心理学という考え方が提示される中で、今までの発達心理学というのは、Variable- Oriented

だとよくいいますね。要するに変数指向的。変数というのは例えば、それこそ例えば知能ですね。まさに個体内の能力みたいな

ものが、現実的にどういうふうになり立っていくのか。あるいはその子どもはどのレベルまで達していくかということですね。そこのところを中心にとって、考えてきた。それじゃいけないだろう、ということで、生涯発達心理学というのは、やっぱりパーソンという、人全体というものを考えていかなければいけない。Person- Oriented という

ようなことを重視する方向に向かっています。しかし、その Person- Oriented という研究の指向性というのも、結局は研究者の理屈で、個人あるいは関係というようなものを理解しようとする試みなんじゃないか、ということですね。要するに、人や関係をある特定の基準に沿って対象化して、それこそ例えばアタッチメント理論でアタッチメントを類型化するみたいに。そういうようなものが、アタッチメント理論.....まさに、関係を扱うけれども、やはりそこでは、研究者によって理論的に対象化された人と人との関係として、それをとらえていく。あくまでも理論をとおしてごく一面的に捉えられる限りの個人であったり関係を。しかし、最近の生涯発達心理学はさらにもう一步進んで、Agent-Oriented でな

• mind-mindednessの発達促進効果

- mind-mindedness (つい心を気遣ってしまう傾向)
やや過剰な内的状態(意図・感情・記憶等)の読み取り
→発達促進的な相互作用→子の自己や心の発達
- 潜在的に「成り込み」や「志向の越境」に通じ得る
- 養育への動機付け(想像的対話)
- 随伴性(→自己の能力に対する自信・他者への信頼)
- 適切報酬性(→自己の感情状態の調整・行為の強化)
- 一貫性(→世界と自己に対する見通し)
- 映し出し(→自己の感情状態の知覚・自他の感情共有)
- Mind-Mindednessとアタッチメントの部分的関連性

• 方法論としての間主観性

- Variable-oriented → 従来型の発達心理学
- Person-oriented → アタッチメント理論
- Agent-oriented → 鯨岡理論
- アタッチメント理論
→Relationship: person-person
研究者が理論を通して把握する限りの個・関係
- 鯨岡理論
→Relationship: agent-agent
研究者が間主観性を通して了解するところの間主観的な「主体」としての個・関係

ければいけないという主張も出てはきています。「わたしはこう生きる人なんだ」という。要するに、研究者が理論という物差しをもって測った、この人はこういうふうな人生を送ってきたんだ、というようなことではなくて、その人自身が主観的な意識の中で、どういうふうな動いてきたのかという部分。そうした自己発動性、主体性のようなもの、これをどれだけ重視していくかというふうなことになる時に、アタッチメント理論は全然そこには踏み込まない考え方なんです。別にそれはよい悪いということではなくて、そういうものなんだと。それに対して、やっぱり鯨岡先生のお考えの関係性の扱いというのは、あくまでも Agent と Agent。これは主体と主体という、それこそ先ほどの（スライド上の）三行というところに盛り込まれているところかもしれませんが、やはり研究者の間主観性をとおして了解するところの間主観的な主体としてのことが関係する。そういった方法論的なスタンスというところでもずいぶん違うところがあるかなという気がします。

- アタッチメント研究の主要方法は間主観性を少なくとも表面的には極力、排除しようとする
- IWMという元来、主観的構成体として在るものに極力、主観性を排した種々の外的手がかりをもって臨む
- Strange Situation Procedure → 個の特性指標
非参加観察・“felt” securityを問題にしながら行動指標（分離と再会）に専ら注視する（行動的近接の特質を暴こうとする）
- Adult Attachment Interview → 個の特性指標
面接・面接現時には間主観的関係が成り立つも、トランスクリプトを別のコーダーが評定・また語りのcontentではなく、structureに着目→主観的情意に踏み込むことなく語用論的特性から心の組織化（表象的近接）の特質を暴こうとする
- Attachment Q-set → 関係性の特性指標
消極的参加観察・潜在的に間主観性が絡み得るが、表面的にはその存在を否定する

アタッチメント理論における両義性

ということで、本当はいろいろと、まだまだというところがあるんですが、両義性の問題ということで.....たった一言だけ、この両義性に関して、根源的な両義性ということに関してだけ言うと。本当はここがいちばん言いたかったところでもあるんですが。あと二分だけお時間をいただいて、ということで。

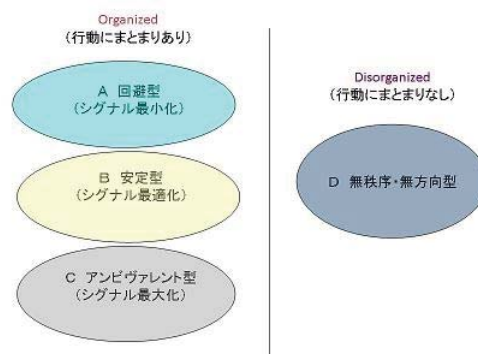
実は、本当は、アタッチメント理論も根源的な両義性なるものを考えてるんだと思います。しかし、そこでやや違うのは、その両義性が人間すべてにおいて根源的というような考え方を必ずしもしないということかだと思います。例えば、アタッチメントのタイプ分けの中で、一般的に最も健康の度合いが高いとされる B タイプの安定型におい

ては、整合希求性というのと自己充実欲求というのは、相克する関係としては、実は全然

アタッチメント理論における両義性

- 「＜私＞という主体は他者（＜あなた＞）への絶対の依存の中から立ち現れる」の発想を共有する
- しかし、アタッチメント理論は根源的両義性を必ずしも「両義的」であるとは見ない
- 少なくとも typical とされる secure type においては
 <整合希求欲求> ↔ <自己充実欲求>
 ではなく
 <整合希求欲求> → <自己充実欲求>
- 発達早期における整合希求欲求の充足が自己充実欲求の十全な発達を先導する
- 内在化された関係性＝表象的近接（危急の際には安全が確保できるという見通し）が個の自律性と自己充実に向けた探索を支える一両者は表裏一体となる（自己充実欲求を充足できる時とは表象的整合希求欲求が充足されている時）

とらえられていないわけです。というのは、どちらかというと、整合希求欲求の充足というのが、イコール自己充実欲求というふうなものである。あるいはそこに相克というところがないのが安定型なんだという認識がある。要するに発達早期における整合希求欲求の充足が、自己充実欲求の十全な発達を先導すると同時に、あとやっぱりこれが、愛着理論の仕掛けなわけですが、



内在化された関係性、いわゆる表象的な近接で、危急の際には誰かが自分を守ってくれて安全が確保できるだろうという見通し、そのいわば整合希求に関わる見通しこそ個人の自律性とか自己充実に向けた探索とかを支えると考えられている。要するに、両者は相克するものではなくて、相矛盾しない表裏一体のものとして、暗に仮定されていることになります。あるいは、それがいい、健康的なんだというふうにある意味考えられている節があります。自己充実欲求を充足できるとき

というのは、表象的近接が成り立っている時.....まあ、この表象的というところがたぶん重要な仕掛けなのかもしれませんが、イコール整合希求欲求が充足されているときということになります。要するに見通しが成り立っているときにこそ、誰かとくっつけるだろうというふうな見通しが主観的に成り立っている

ときにこそ、人は自律的であるということですね。だから、少なくとも、安定型に関しては、理屈上、それは、くっつきたい、だけど、何かやりたいというような相克ということにはならないことになるわけです。

(スライドが) いろいろ動かなくなってきた、やめろってということですね (笑)。

むしろ、アタッチメント理論では、根源的両義性が、すべての個人でというよりは、むしろ特定の個人において、きわめて顕著に現れるという見方が暗にされていると言えるかもしれません。つまり、アンビバレントタイプとか回避タイプなんかが、まさにこの整合希求性とか、あるいは自己充実欲求というところの矛盾であったり相克を深く抱え込んでいる存在として描かれているのかなという気がいたします。

ま、そういうようなところで、ちょっと、本当はこの他に、存在両義性と相互主体性と

- むしろ二つの欲求の相克は人間存在に根源的というよりは、「ある」個人あるいは関係性に特異的な形で生じると仮定される
- Ambivalent type: 相克の直中にあり、自己充実欲求を部分抑圧(探索の縮小)・整合希求欲求の優位化
- Avoidant type: 相克を抱えつつ整合希求欲求の部分抑圧(屈折した表出)・自己充実欲求の優位化
- Disorganized type: 二つの欲求が解離し、そのいずれもが不自然にフリーズ(離れたいのかくっつきたいのか)が定まらないどっちつかずのアタッチメント)
- ただし、アタッチメント理論は同じく整合に関わり得る affiliation や Care-giving を attachment とは別システムと把握する

いうところまで、少し考えてはきてはいたんですが、ちょっと時間があまりにも過ぎておりますので、ここで終わりたいと思います。中途半端になってしまい、すみません。

話題提供に対する質疑応答

森岡 ……聞きたいこといっぱいあります。

でも、物理的近接から表象的近接へと、子どもがとらえ直すという、これは大事な臨床的課題で、確かにそばにずっといたんでしょう。しかし、安心感がないというね。われわれ（臨床家）の方が多くのエピソードがあるような気がするんですね。そのときに、子ども側を主体的な表象近接へととらえ直していくという、その要因というか……それはアタッチメント理論において研究されてるんですか。その部分のメカニズムというか、情報がありましたら教えてほしいんですが。

遠藤 アタッチメント理論の中ではそれが欠けていたわけですね。

森岡 そうそうそう。

遠藤 欠けていて、それこそ最近むしろ精神分析的な基盤、基礎を持った愛着研究者が、その重要性というところを要するに強調するようになってきていて、例えば、それをメンタライゼーションというような言葉で言います。

森岡 メンタライゼーションね。

遠藤 要するに、心を理解する能力というのが、関係性というものを作って維持していく上では、当然不可欠だ。で、アタッチメントの中で実は、自己とか他者の心的状態というようなものの読み取りの基礎というのは、本来はできあがるはずだけれども、従来の、ボウルビィ的な愛着の理論の強調点というのは、アタッチメントというのを、子どもが不安や怖れを経験したときに、その情動の制御をしてくれる機能というところに絞りこんでいたんですね。「怖い」、「不安だ」、というところで、くっつける、それで要するにほっとす

る。という、その Felt Security という主観的な安全感が得られるということを通して、例えば、他者に対する信頼や自分に対する信頼というものが確立されていくというところだけが強調されていたようなところがあるんですけども。しかし、最近はそうではなくて、もう一方で言うと、そこにかかわるような話も実はあって、そこだけの図を、ちょっとそこだけ。

.....例えば、こういう.....従来はここだけ強調されていた。ここだけが。愛着理論では、とにかく「怖い」、「不安だ」というところで、愛着が安定していることによって、情動が制御される。守ってもらえる。それで安心感を得る。安心感を得るということがたび重なると、ちゃんと自分自身とかに対して、それこそ、人から愛してもらえるんだとか、あるいは、ほかの人ってのは困ったことがあったときには、ちゃんと自分を見てくれてるんだとかいうような、一般化されたいわゆる思い込みのようなものとして、内的作業モデル、インターナル・ワーキング・モデルが成立していく。で、それが例えばパーソナリティの発達に影響を及ぼしていくんだという、ここだけが注目されてきたんですね。

しかし最近、実はアタッチメントの中でもうひとつ、別の経路でこの発達というところにごくかかわるところがある。それは何かというと、アタッチメントが安定しているというか、緊密な関係性というのが送られているときというのは、まさに、両者、情の映し合いということが生じている状況でもあるだろうという。それはミラーリングという言葉で、これは鯨岡先生も、ローカルマーカ―とかミラーリングという言葉をとときどき使われているわけですが、これはもっともっとそれに関していうと、精神分析的な発想なんです。子どもと同じ感情状態を返すけれども、決してそのままではないというね。だから例えば、不安や恐れというときに、ただ抱っこしてなぐさめるかという、養育者はそんなことはなくて、子どもと一緒に何か悲しそうな顔をした後で、「それでも大丈夫よ」と。あるいは、子どもがちょっとカッとなって、怒りを表出してきたときにも、ちょっとお母さんが同じような顔をしてから、それをなだめるという。要するに、その子ども自身の心的状態を返すと同時に制御するというのを、二重にやってるというね。で、それがどちらかが欠けても良くないんじゃないか、という認識が出てきている。ただ、養育者が上の立場から下にいる子どもを見守り、その子どもの安全を守るというようなところで、子どもの発達というのがうまくいくかという、おそらくそうではなくて。要するに子どもと一緒に、同じ情動状態を共有するということがひとつ重要になるだろう。逆に、その反対もあるわけで、例えば、子どもの、その経験して表出した恐れみたいなものに養育者が巻き込まれて、養育者自身がそれでアップセットしてしまうというような状況。で、全然子どもを制御しない、調整しないということになると、それもまた問題があるということになる。要するにこの二重の過程というものをとおして、実は発達というところにアタッチメ

ントは影響を及ぼしていくんだというところで、実はここをどう理解し研究していくかというのが、今の愛着研究の課題になってきているということですね。そういうことがあります。はい。

森岡 わたしもミラーリングとかうつしとか言っていますんで、たいへん参考になりました。ありがとうございました。

